【特別インタビュー①】

つないでいきたい被爆世代の思い

国際赤十字ユース代表
高垣慶太

現役の大学生として、また赤十字国際委員会のユース代表として核兵器問題にとりくむ高垣慶太さんに、ご自身の活動やこれからについてお話を伺いました。高垣さんには2025年8月9日、10日に広島で開催される全障研大会の記念講演でお話をしていただきます。（聞き手 本誌編集長：塚田直也）

トラウマから少しずつ前へ

――本日はよろしくお願いします。国内だけでなく世界で核兵器問題にとりくむ高垣さんですが、このテーマへの問題意識はどのように生まれてきたのでしょうか。

僕が通っていた保育園は平和教育に熱心でした。原爆に関する絵本の読み聞かせがあったり、遠足で原爆資料館に行くという園でした。僕も年長の時にはじめて資料館に行きました。現在の展示にリニューアルする前、被爆者の人形が展示されていた頃です。被爆して黒焦げになった方の写真などを見てものすごくショックを受けました。その場に座り込んで戻してしまい、トラウマになりました。

それから中学校1年生ぐらいまではトラウマが続きました。夢に出てきたり、一時期は平和公園に近づくのも嫌でしたし、テレビで戦争の特番をやっているのを見るとひどい時には過呼吸になったりしていました。なので今自分がこういうふうに活動するとは想像できませんでしたね。

――感受性が高かったのですね。改めて平和や戦争に向き合うきっかけのようなものはあったのでしょうか。

要因はいろいろあると思いますが、ひとつは僕の家族の体験が自分自身をここまで引き寄せたことはあると思っています。僕の二人の曾祖父は広島と長崎でそれぞれ開業医をしていて、原爆投下後は救護にあたっていました。小学校6年生ぐらいの頃に長崎の祖母から、曾祖父が被爆者の治療をしていた時の話をはじめてちゃんと聞きました。

当時の僕は資料館で見たイメージがあるので、被爆した人について黒焦げになった人とか幽霊のようになってしまった人というように怖いイメージがありました。曾祖父の治療の様子をその場で見ていた祖母に「怖かった？」と聞くと、祖母は「怖いというよりかわいそうだね」と言いました。その言葉がすごく腑に落ちました。僕は被爆者の人たちの前後はわからないのですが、祖母たちにとっては原爆が投下されるその前までは笑ったり泣いたり夢があったりと同じように生活していた人たちだったと思うんです。誰もこんな姿になりたくはなかったはずです。祖母の言葉によってそういうふうに考えられるようになりました。

もうひとつのきっかけは中学3年の時に参加したスピーチ大会です。その時に二人の曾祖父のことについて話しました。それからやっとなにか自分もやってみたいという気持ちに踏みだせました。

心境的にはこのようなステップがありました。自然と曾祖父たちの記憶を聞くという体験を通して、導かれたというか、前向きな気持ちに僕自身がなれたのだと思っています。

ターニングポイントとなった被服支廠の取材

――ご家族もいろいろなことを思いながらも高垣さんのことをあたたかく受けとめてくださったんでしょうね。高校に入り、その後の心境はどのように変化していったのでしょうか。

1年生の時は市民グループが主催する原爆展のお手伝いをしたり、被爆証言集の校正や英訳のお手伝いをしたりしました。2年生になり、担任の先生に誘われて新聞部に入りました。僕の通っていた高校の新聞部は校内の出来事の取材もしますが、学校の外で起こっているさまざまなことも取材していました。たとえば2016年にオバマ大統領が広島に来た時には、なんとか本人をとらえようとビルの上から撮影の機会をうかがったりもしましたし、映画「この世界の片隅に」の片渕須直監督の取材をさせてもらったこともあります。

それで、平和活動をしていた僕は記者としてそれをテーマにして新聞を書こうととりくみました。その中でも自分の中でターニングポイントとなったのが、2019年12月に突如発表された、旧広島陸軍被服支廠（ひふくししょう）の一部解体計画でした。僕はそれまで広島に被服支廠という被爆建物があったことも、そこにある歴史についてもまったく知りませんでした。

僕たちは平和教育の中で原爆が投下された後のことを学びますが、では広島が、原爆が落ちる前はどんな街だったかと聞かれたら、たぶん大半の方たちは答えられないのではと思います。被服支廠は原爆ドームの前年に建てられました。「旧陸軍」と付いているように、そこでは軍服やリュックサックなど兵隊たちが身に着けるものを作っていました。もう少し歴史を遡ると、日清戦争の時には東京から明治天皇がうつってきて、広島は一時日本の首都になりました。港が作られ、全国の兵士たちがそこから海外に出兵していく。その過程の中で被服支廠をはじめいろんな軍需工場が作られていきました。戦争における原爆という被害の視点でしか見ていなかったけど、実は広島にはアジア・太平洋地域に向けた出兵の拠点となったという加害の側面があるのです。

「被害」と「加害」という2つの視点がこの被服支廠という建物にあることにとても衝撃を受け、そしてその一部をなくしてしまうことがはたして本当にいいのだろうかという問いが立ち上がってきました。今は被爆